

日本分析化学会第58年会

1 はじめに

日本分析化学会第58年会は2009年9月24日(木)から26日(土)の3日間をかけて、北海道大学高等教育機能開発総合センター(高教センター)で開催された。今回は、秋のゴールデンウィークと呼ばれる5連休があったため、これを避けた形で連休直後を開催日とした。年会の会期は連休後であるが、会場の準備のほうは、連休返上で行う必要があった。総合受付と、主講演会場は高教センター内とし、ポスター会場と展示会場は別の建物である「はるにれ食堂」に設営した。特別シンポジウムは3件行い、そのうち1件は市民向けの公開シンポジウムとした。学会初日に若干の小雨に見舞われたが、それ以外は天候に恵まれ、会場間の移動も問題なかったように思う。連休の影響が心配されたが、総講演数872件(研究懇談会講演20件、授賞講演11件、シンポジウム講演12件を含む)、参加登録者数1,325人となり、盛会となった。報道関係への広報は9月14日に東京で記者会見を行ったが、札幌での記者会見は連休と重なったため行わなかった。

2 講演

[講演責任者: 坂入正敏(北大院工)] [会場責任者: 谷 博文(北大院工)]

講演は高教センターE棟7会場、N棟2会場、S棟2会場および大講堂、はるにれ食堂の計13会場で行った。口頭発表の会場は、いずれも液晶プロジェクターが設置された100名以上収容できる教室を準備した。高教センターの教室は改装されたばかりで机・いす等も新調されて快適な会場となった。

口頭発表では、昨年と同様PCと液晶プロジェクターを使用した。今年会では講演データの持ち込みではなく、講演データ入りのPCを講演者各自が持ち込む方法を採用した。これは昨年度、講演データを入れたUSBメモリを介して講演用PCがウイルス感染したことを踏まえた対応であり、5月の討論会



講演会場

(和歌山)で試行されている。このため、2~7講演ごとに15分のPC接続時間を設け、この間に次のセッションの講演者すべてのPCを設置してもらうこととした。また、講演者のPCはすべてPC切替器を介してプロジェクターに接続し、次の講



会場入口

表1 第58年会分類講演申込み及び聴講者数一覧表

分類	一般講演者数	英語講演	最大聴講者数	一般ポスター	若手ポスター	テクノロジーレビュー
01: 原子スペクトル分析	29		80	13	2	3
02: 分子スペクトル分析	18		51	13	10	
03: レーザー分光分析	9	1	44	2	2	
04: X線分析・電子分光分析	10		45	4	10	
06: NMR, ESR, 磁気分析	2		32	2		
07: 熱分析	1		22	1		
08: センサー	14		45	3	13	
09: 電気化学分析	37		41	6	14	
10: 質量分析	11		53	12	2	
11: 有機微量分析(元素分析を含む)	2		67			
12: FIA	20	1	53	1	3	
13: LC	26		73	16	12	1
14: GC	10		50	3	1	2
15: 電気泳動分析	9	1	50	3	2	
16: マイクロ分析化学	9	1	52	8	4	
17: 分離・分析試薬の設計	12		50	17	7	1
18: 抽出・イオン交換	12	1	43	8	7	
19: サンプリング, 前処理	2		40	5	3	
20: 分析化学反応・速度論的分析	7		32	2	2	
21: 標準試料	4		36	6		
22: 基礎理論・基礎データ	1	2	28	3		
23: 環境・地球化学関連分析A	54	3	79	32	14	
24: 環境・地球化学関連分析B	10		56	12	9	1
25: 生体関連・医薬・法科学分析	21		67	16	5	
26: バイオ分析	57	3	71	10	13	
27: 無機・金属材料分析	7		50	6		
28: 有機・高分子材料分析	6		38	5	2	
29: 界面・微粒子分析化学	40	2	64	4	13	
30: その他			45	2	1	
合計	440	15		215	151	8

演に移る際は切替器のスイッチ操作で対応することとした。8台接続可能な切替器を学会事務局にご用意いただいたが、複数台のPCを用いた実際の接続・切替操作の練習が不十分だったせいもあり、切替器がうまく機能しない状況が数件発生した(このときはケーブルの抜き差しで対応した)。また、会場前方の講演者の立ち位置のすぐそばには、最大7台の講演者用PCを設置する台を用意する必要がある上、それらのケーブルが絡みあうことのないよう配慮しながら講演者のPCを講演者用のテーブルに移動させる必要があった。こうした作業は見た目にも実際にもスマートな方式とは言い難く、今後も引き続き検討する必要がある。

ポスター発表は付設展示会と同一会場とするため、はるにれ食堂のいす・テーブルを撤去し1,2階のフロアをすべて用いて行った。初日は若手ポスター講演を3セッション(151件)、二日目と三日目は一般ポスター講演を2セッションずつ(106件, 109件)実施した。各セッションのコアタイムは講演番号の奇数・偶数各45分ずつとし、ポスター掲示時間は前後15分を入れた2時間とした。セッション間のポスター入れ換え時間が15分しかなかったが、大きな混乱もなく行われた。口頭発表会場から近いせいもあり、多くの参加者が来場し、活発な討論が行われていた。

3 特別シンポジウム

公開シンポジウムを含め三つの特別シンポジウムを開催した。

1) 「宇宙・地球化学と分析化学」(初日, 午後) [企画提案: 乗木新一郎(北大院環境) 最大聴講者数30名]

海底堆積物, 海洋生物, 大気気体, 隕石など広い時空間スケールを対象とした自然科学と分析化学との接点を最新のトピックスを例示して講演していただいた。

1. 液体クロマトグラフィー質量分析計(LC/MS)によるアーキ脂質分析と古環境研究への応用: 関 宰(北大低温研), 2. ハロゲン化ヌクレオシドを用いた海洋微生物の生態研究: 浜崎恒二(東大海洋研), 3. 大気中の二酸化炭素・酸素の連続測定と地球化学における応用: 遠嶋康徳(国立環境研), 4. 同位体顕微鏡によるアイソトポグラフィー: 原理と宇宙化学への応用: 坂本尚義(北大院理)。

環境関連の一般講演の件数が多く、時間帯を同じとせざるを得なかったためか、多くの参加者を得る事ができなかった。

2) 「微小反応場を利用する分析化学の新展開」(二日目, 午前) [企画提案: 上館民夫, 谷 博文(北大院工), 最大聴講者数25名]

ベシクルやミセルなどの微小な空間が提供する特異な化学反応場は、分析化学の分野において増感反応場や高性能分離媒体として広く応用がなされてきた。本シンポジウムでは、こうした微小反応場の新たな開発・機能解析・応用に関するご講演をいただき、分析化学におけるこの分野の展望について討論を行った。

1. ジャイアントベシクルのバイオ分析への応用: 豊田太郎(千葉大院工), 2. 規則配列ナノビーズ構造体ドットを反応場とした酵素免疫測定: 内山一美(首都大都市環境), 3. 逆ミセ

ル界面ナノ反応場の特異性と化学発光分析への応用: 藤原照文(広島大院理), 4. 新規ハイパーブランチポリマーの創製と分子認識特性: 佐藤敏文(北大院工)。

会場がややはずれにあったせいもあり、参加者数が今一つではあったが、活発な討論が行われた。

特別公開シンポジウム「食の機能を分析する」～道産食材の可能性～(三日目, 10:00~12:30) [企画提案: 財団法人北海道科学技術総合振興センター, 日本分析化学会第58年会実行委員会, 参加者40名]

本シンポジウムは、第58年会と勸北海道科学技術総合振興センター「さっぽろバイオクラスター“Bio-S”」との共催で開催し、食の機能に関心のある一般市民に公開し、その科学的内容を北海道に関わりの深い4名の産学官の方に、それぞれの専門の立場からご講演いただいた。また、研究開発によって得られた製品をブース展示した。

1. 鶏由来の素材の機能性: 森松文毅(日本ハム中央研究所), 2. ビール醸造について: 二渡 整(サッポロビール北海道工場), 3. 抗酸化成分とは?: 宮下和夫(北海道大学大学院水産科学研究院), 4. 十勝産農畜産物の付加価値向上に向けて: 大庭 潔(十勝圏振興機構食品加工技術センター)

会場(クラーク会館)がメイン会場から離れていたせいも、参加者数は今ひとつであったが、活発な討論がなされ、食品の機能性と成分分析に関する関心の高さが伺われた。なお、講演の合間に北大パイプオルガン研究会によるパイプオルガンの演奏(G線上のアリア等)を取り入れ、参加者に楽しんでいただいた。

4 若手企画(若手ポスター講演)

若手ポスター講演(初日, 9:30~16:00) [企画提案: 石坂昌司(北大院理)]

若手交流会北海道支部の企画として若手ポスター講演を企画した。本企画では、分析化学の将来を担う大学院生や若手研究者に、社会的ニーズとの関連を踏まえ他の学問領域や産業界への波及効果に配慮して、斬新な研究成果をアピールし、情報交換ならびに交流を深めてもらうことを目的とした。当初は80件程度の講演を予定し募集を行ったところ、151件もの講演申込があり、初日の午前から午後にかけて3回のセッションに



ポスター会場

分けて発表を行った。本講演では優秀ポスター賞を選考した。選考委員には若手交流会各支部推薦者2名ずつの12名、北海道支部の3名を加えた15名で選考に当たった。発表内容を審査し18件の発表を優秀ポスター賞として選出し、ミキサー会場にて実行委員長名で表彰し、賞状の贈呈を行った。

5 付設展示会

[企画責任者：古月文志（北大院地球環境）]

展示会は、展示のほか、カタログ・書籍展示も行った。昨年末の不況により出展していただく企業の減少が危ぶまれていたが、幸い予定していたブースは埋めることができ、御協力いただいた企業の方に感謝する次第である。

前述のように展示会場はポスター発表会場と同一とした。このためポスター見学のついでに来場者も多く、展示に御協力いただいた企業の方にも好評であった。

6 学会賞等授賞式、学会賞講演等

学会賞等の授賞式及び、受賞講演は二日目の13時15分より、大講義室（U会場）で行われた。中村会長の挨拶の後、学会賞、奨励賞、学会功労賞、技術功績賞、及び有功賞の各審査経過が述べられて後、会長から賞状と副賞が贈呈された。その後、14時30分より学会賞受賞講演が行われた。学会賞講演は荒川隆一、北森武彦、萩中 淳の3氏によって行われ、参加者から盛大な拍手を得ていた。また、技術功績賞を受賞された千葉光一、藤本京子、吉田善行の3氏、および奨励賞を受賞された青木 寛、加地範匡、諏訪雅頼、宗 伸明、中西 淳の5氏の受賞講演は、関連する一般講演会場で行われた。恒例となっている有功賞受賞者の記念撮影は、授賞式後、高教センター正面玄関前で行われた。

7 テクノレビュー及び研究懇談会講演

企業のテクノレビューは、初日、二日目に設定し、また関連する一般講演の中で行うように配慮した。また、初めての試みとしてランチョンセミナーを二日目の昼休みに2会場で行った。これは企業の宣伝を兼ねたセミナーを食事をとりながら行うというものであった。情報が行きわたらなかつたためか予定の半分程度の参加者であった。食事をとれるのは食堂の混雑緩和にもなることから、次回からは十分な案内のもとで行われることが望まれる。

研究懇談会講演は13の研究懇談会で全部で20件の講演を行った。一部を除いて初日の最後のセッションとして行った。これはできるだけ一般講演と重ならず参加者が出席しやすいようにするための配慮である。

8 ミキサーおよび懇親会

ミキサー〔責任者：福嶋正巳（北大院工）〕は、初日18時より136名の参加者を得て、新装された工学部食堂で盛大に行われた。開会の挨拶の後、中村 博実行委員長の発声にて乾杯を行い、開演した。その後、若手ポスター賞の授与式が行われた。

懇親会〔責任者：坪井泰之（北大院理）〕は、二日目の夜、サッポロファクトリーのイベントホールにて開催した。約350



アジア諸国の先生方のご挨拶（懇親会）

名が集い盛況であった。学会会長、実行委員長の両中村先生の挨拶に続き、鳴津北海道支部長の乾杯のご発声により懇親会はスタートした。定刻午後6時の開宴開始から乾杯までわずか10分というスピード進行であった。短いスピーチ、ノーアトラクションというシンプルスタイルが北海道支部開催の特色となりつつある。北海道らしいアトラクションを期待していた方も多数おられたかもしれないが、食事や会員間の交流の時間をなるべく多くしたいという実行委員会の考えでもあった。アトラクションがない代わりに、最近発足した「アジア分析化学ネットワーク」でアジアの近隣諸国からお迎えした10名の先生方からご挨拶を賜った。午後8時をもって中締めとし、以下、三々五々お開きとなった。

9 その他

本年会では昨年に引きつづき、男女共同参画事業活動の一環として会場内に託児所を開設した。運営は託児サービス会社に委託した。利用者は、3日間で、延べ6名であった。

休憩室は、4室設置し、北大大型計算機センターの協力で各室ともインターネットが使用できる環境とした。利用者には好評であった。また、今年会初めての試みとして、各支部の活動を宣伝するためのブースを休憩室内に設置した。今年は各支部への案内が遅かったため準備が間に合わなかつた支部もあったが、五つの支部の展示が行われた。

10 おわりに

58年会の実行委員では特に最初から決めていたわけでは無いが、結果として以下のことに配慮した運営となったように思われる。

1) シンプルで分かりやすく、2) 環境に配慮した運営である。懇親会でのアトラクションの廃止や、エコバックの採用、観光パンフレットの一部廃止などであるが、これらがサービスの低下とみなされなければ幸いである。また北海道支部は小さな支部なので、支部の会員あげての全員野球であり、また、今回は特に支部の若手の方に実行委員会のいろんな分野で活躍をしていただいた。これが今後の支部の活性化にもつながることを期待したい。

〔第58年会実行委員会 中村 博、田中俊逸〕